

東方の博士たちが見た「星」とは

●南米チリの山に、世界最大の望遠鏡と言われるアルマ望遠鏡があります。この望遠鏡はなんと 138 億光年（一光年は約 9.5 兆km）も離れた星を見ることができそうです。近年、天文学の分野においても、人類は目覚ましい進歩を遂げています。しかしそれによって得られる情報が、私たちにどれほどの影響を与えているかという点、意外にもそれほど大したことはないもののように感じられます。しかし今から約 2000 年も昔に、星を見てこの世界のすべてのものに関わる最も重大な、まさに世紀の大発見をした人々がいました。彼らは「東方の博士たち」と呼ばれています。

1. 「星」を見てエルサレムにやって来た東方の博士たち

【新改訳 2017】 マタイの福音書 2 章 1～

- 1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。
- 2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るので、礼拝するために来ました。」
- 3 これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。
- 4 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。
- 5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。
- 6 『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』」
- 7 そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。
- 8 そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。
- 9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ、かつて昇のを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。
- 10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。
- 11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。
- 12 彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。

●「東方の博士」と訳されていますが、彼らはマジ、マグス、あるいはマゴスと呼ばれる、メディア・ペルシャの神々、すなわち異教の神に仕える祭司であると考えられます。彼らの国は異教の国ではありましたが、彼らの国には、かつてあの預言者ダニエルがいました。ダニエルはメシアが来られる時期について、御使いガブリエルから告げられた言葉を書き残していました。

【新改訳 2017】ダニエル書 9 章 20～26 節

20 私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、【主】の前に伏して願いをささげていたとき、

21 すなわち、私がまだ祈りの中で語っていたとき、私が初めに幻の中で見たあの人ガブリエルが、すばやく飛んで来て私に近づいた。それは夕方のささげ物を献げるころであった。

22 彼は私に悟らせようとしてこう告げた。「ダニエルよ。私は今、悟りによってあなたを賢明にさせようとして出て来た。

23 あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが出されたので、私はそれを伝えに来た。あなたが特別に愛されている者だからだ。そのみことばを聞き分けて、その幻を理解せよ。

24 あなたの民とあなたの聖なる都について、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の有めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。

25 それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから、油注がれた者、君主が来るまでが七週。そして苦しみの期間である六十二週の間に、広場と堀が造り直される。

26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。

●ダニエルはこれをメディアの王ダレイオスに仕えていた時に書き残しています（ダニエル書 9:1）。彼らの国でこのダニエルがいかに偉大な働きをしたかはダニエル書を読めば理解できます。この当時の博士たちの時代から 500 年以上前の人物ではありませんが、ダニエルは尊敬され、畏られる存在として後世に伝えられていたことは容易に想像がつかます。博士たちはダニエルのこの文書を手に入れ、メシアの来られる時期について読み解いたと考えられます。

●しかし聖書は、預言書は神の助けなしに読み解けるものではありません。そこで博士たちは「**私たちはその方の星が昇るのを見た**」と言っています。聖書の中で「**星**」はしばしば御使いの比喩として用いられています。例えば、

【新改訳 2017】ヨブ記 38 章 7 節

明けの**星々**がともに喜び歌い、**神の子たち**がみな喜び叫んだときに。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 1 章 20 節

あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。

七つの**星**は七つの教会の**御使**たち、七つの燭台は七つの教会である。

●このように、**博士たちが見た「星」とは御使い**、おそらくダニエルの時と同様、ガブリエルであったと考えられます。御使いは多くの場合、神の御言葉を伝える目的で現れます。御使いは博士たちにダニエルの預言の解き明かしをし、さらにその正確な場所をも指し示しました。そう考えるならば「**星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった**」という言葉も容易に理解できません。

2. 聖書における御使いの象徴

●エレミヤ書 51 章 13 節に、「大水のほとりに住む財宝豊かな者よ。あなたの最期、あなたの断ち滅ぼされる時が来た。」とあるように、バビロンの最期が描かれています。主はバビロンを滅ぼす手段として他国人を送られますが、その他の手段として、主に仕える御使いたちも動員されるのです。エレミヤ書 51 章 16 節には、その御使いたちのさまざまな表象が描かれています。御使いたちのさまざまな表象を知るとは、聖書全体における神のみわざの顕現を理解する上できわめて重要です。

【新改訳 2017】エレミヤ書 51 章 16 節

主の御声に、天では水のざわめきが起こる。

主は地の果てから雲を上らせ、雨のために稲妻を造り、ご自分の倉から風を出される。



●上記の聖句には「声」「水」「雲」「雨」「稲妻」「風」の表象が取り上げられています。ヘブル語で、「声」は「コール」(קוֹל)、水は「マイム」(מַיִם)、雲は「ナーシー」(נֶשֶׁיִם)、雨は「マータール」(מָטָר)、稲妻は「パーラク」(קָרָק)、風は「ルーアツハ」(רוּחַ)です。順に見ていきます。

(1) 声 (音、雷鳴)

●神の「声」は、それは「音」や「雷鳴」とも関係があり、「息」や「風」とも連動します。「声」は第一義的には神ご自身の臨在を表わしますが、神に仕える御使いたちも神のメッセンジャーとして人に語りかけます。聖書にはそのような場面が数限りなくあります。たとえば、出エジプト記 3 章 2 節では神の山ホレブで主の使いがモーセに現われます。御使いは「柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えているのに柴は焼け尽きなかった」のです。この光景を目にしたモーセがもっとよく見ようと近づいたとき、「モーセ、モーセ」と呼ぶ神の声を聞きました。見ているのは御使いであるにもかかわらず、耳にした声は主ご自身の声でした。主が声を出されるときに、そこに御使いがいることが分かります。

●主の民が敵との戦いに際してしばしば雷鳴が伴っています。たとえば、I サムエル 7 章 10 節にはこうあります。「ペリシテがイスラエルと戦おうとして近づいて来たが、主はその日、ペリシテ人の上に、大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱したので、彼らはイスラエル人に打ち負かされた。」とあります。「雷鳴」は単なる自然現象ではなく、そこに御使いたちがかかわっています。「主は、はむかう者を打ち砕き、その者に、天から雷鳴を響かせられる」からです(I サムエル 2:10)。詩篇 18 篇 13~14 節も参照。

●御座からは、神の力と栄光が、稲妻や雷鳴のとどろきのように起こっているのをヨハネは見ています(ヨ

八ネの黙示録 4:5)。御使いが天の金の香炉を取り、祭壇の火でそれを満たして地に投げつけると、雷鳴と声と稲妻と地震が起こりました(同、8:5、16:18)。

(2) 水(ざわめき、大雨)

●「水」はすべての被造物にとって必要不可欠なものです。ノアの時代、神が地をさばかれる時、巨大な大いなる水の源が張り裂け、天の水門が開かれたため、地に大洪水が起こったと記されています(創世記 7:10～11)。神は水によるさばきがないことを約束しておられます。

「(主よ、あなたは)・水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使とされます。」(詩篇 104 篇 3～4 節)。ここにある「水」「雲」「風」「火」はすべて御使いの表象です。

(3) 雲 (密雲、濃い雲、雲の柱)

●「雲」も御使いの表象です。出エジプト記 40 章はモーセの幕屋が完成したことを記している章です。34 節以降に「栄光の雲」についての記述があります。

【新改訳 2017】出エジプト 40 章 34～38 節

34 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。

35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。

36 イスラエルの子らは、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。

37 雲が上らないと、上る日まで旅立たなかった。

38 旅路にある間、イスラエルの全家の前には、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があった。

●昼間は「雲」ですが、夜になると「火」になるのです。これは文字通りの意味ではなく、御使いの表象です。御使いが神の民を導き、そして守ったのです。

●また「雲の柱」「火の柱」という表現も御使いの表象です。「モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、天幕の入り口に立った。主はモーセと語られた。民は、みな、天幕の入り口に雲の柱が立つのを見た。民はみな立って、おのおの自分の天幕の入り口で伏し拝んだ(出 33:9～10)とあります。雲の柱の中に主が臨在しておられるのです。ソロモンが神殿を奉獻した時にもそのことが現わされています。

【新改訳 2017】I 列王記 8 章 10～11 節

10 祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が【主】の宮に満ちた。

11 祭司たちは、その雲のために、立って仕えることができなかった。

【主】の栄光が【主】の宮に満ちたからである。

- ちなみに、8章12節で「主は、暗やみの中に住む」とありますが、その「暗やみ」とは「密雲」(「アラフェル」 אַרְפֻל)のことです。主は御使いの表象である「密雲」の中にとどまっておられるのです。

(4) いなずま (稲妻、稲光)

- 「いなずま」(いなびかり)は光ですが、必ず、雷鳴や雨、密雲と結び着いています。神は「光を衣のように着ておられるのです」(詩篇104篇2節)。主が、ご自身の民に律法(トーラー)を与えようとしてモーセをシナイ山の頂に呼び寄せたときも、山の上に「雷と稲妻(קָרָק)と密雲と煙と火」があったことを聖書は記しています(19:16~)。これらもすべて御使いの象徴と言えます。ヘブル人への手紙2章2節に「御使いたちを通して語られたみことば」というフレーズがあります。これは「モーセの律法」のことで、神から御使いに伝えられ、御使いからモーセに伝えられたものです。

- 「いなずま」を意味する「パーラク」(קָרָק)は、比喩的に「きらめき」という意味にも使われ、「きらめく剣、光る剣」(申命記32:41)、すなわち「さばきのための剣や槍」として用いられます。

(5) 風 (息、霊)

- ヘブル人への手紙1章7節に、はっきりと「神は、御使いたちを風とし」とあります。「風」(「ルーアツハ」 רוּחַ)は御使いの表象です。風は直接に見ることはできませんが、ひとたび吹き過ぎる時、木の葉をそよがせ、枝を揺るがします。そのことで風の在り処を目でとらえることが出来ます。しかし、どこから来て、どこへ行くのかだれにも分からないのです。これが風の特徴です。風は息とも霊とも同義です。声も息なしには相手に通じない。息の流れの中にいのちがあります。

- しかし、その同じ「息」が、さばきの息、さばきの「風」ともなるのです。イザヤ書40章に「すべての人は草、その栄光は、みな草のようだ。主のいぶきがその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。」(6~7節)とあります。ここでの主の「いぶき」は「ルーアツハ」ですが、さばきの風の一例と言えます。イスラエル(中東)の気候は夏と冬に大別され、春と秋はその間の短い移行期間でしかありません。その移行期の春や秋に吹くのが東風。アラビア砂漠から吹く強烈な熱風です。聖書では「東風」(「カーディーム」 קָדִימ)と呼ばれます。

【新共同訳】出エジプト記 14章21節

モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。

【新共同訳】エレミヤ書 18章17節

東風のように、わたしは彼らを敵の前に散らす。災いの日に／わたしは彼らに背を向け、顔を向けない。

- 以上のように、聖書には自然現象としての「声」「水」「雲」「雨」「いなずま」「風」「火」がありますが、

御使いたちの働きを表わすさまざまな表象もそれらによって表わされていることが多いのです。あるいは自然の現象の中に御使いの働きが重ねられてもいるのです。そのことを知ることで、聖書をより正しく解釈することができると思います。

おわりに

●主の御使いは聖書の初めから終わりまで、常に働いています。特に、ヨハネの黙示録に至っては、良い御使いの働きも悪霊たちも、その働きが顕著です。今回のセレブレイト・スッコートでは「イエシュアの誕生とその周辺」を取り上げていますが、イエシュアと誕生とその公生涯、および初代教会においては、御使いの働きは顕著です。彼らの働きは主に主を信じる者に仕える霊ですから、主を信じる者には大きな励ましです。さまざまな自然現象の中にも主の御使いは働いていることを心に留めたいと思います。東方の博士たちのように。

2019.10.23

神田 満 / 銘形秀則